


 ずいそう

## NO といわない人生

田 邊 剛



私は現在 69 歳、未だ現役で最前線で指揮を執っているが、未曾有の建設不況の中、何とか活路を見つけ生き残りを果たそうと努力中の毎日である。

大学卒業後、清水建設に 22 歳で入社、以来この道 47 年間、約半世紀にわたって生き抜いて来たことになる。もちろん世の中には私の記録など問題にならない多くの先輩諸氏がおられるので、建設業で働いてきた長さをことさら申し上げるつもりはない。

このたび社団法人日本建設機械化協会から執筆方依頼があったので、この機会に自分の過ぎ来し方を振り返り、死ぬまで変わることのないであろう「生き方」について論じてみたい。

標題の「NO といわない人生」を自らの指針とし、迷わず実践しようと思いはじめたのは、40 歳になってからのことである。昭和 48 年第一次オイルショックが日本を襲い、ついで昭和 53 年第二次オイルショックが相次ぎ、我が国は好況から不況に突入し、建設業「冬の時代」が到来した。供給が細りインフレが亢進し、スーパーなどの売場から買い占めによりトイレットペーパーが店頭から姿を消した事など記憶に残っておられる方も多かろう。

当時は、中東産油国からの原油価格急騰で狂乱物価上昇を招いたものであるが、まさに中東産油国の一人勝ちの様相を呈し、全世界が通商を求めてオイルグラマーに潤う中東詣でを行ったことは、私もイラクの首都バグダッドで巨大プロジェクトに参加した一人として未だ記憶に新しい。

私は 44 歳の時に、漸く東京世田谷に小さな我が家を建て家族を引き連れ移り住み、社宅生活からおさらばできたと思ったのもつかの間、ほんの数ヶ月我が家に住んだだけで、初の海外工事に派遣されることになる。与えられた任務は、リクルーターとして必要なマンパワーを工程に応じてタイムリーに必要な工数を現地サイトに送り込む任務で、インド、パキスタン、バングラデッシュなど政府との雇用条件について交渉やイラク大使館でワーカーのビザ取得、ワーカーの家族への送金のための銀行口座の開設、そして百数十職種にのぼるワーカーの選定と送り込みのための航空機のチャーターやブッキングなど数え上げればきりが無い仕事待ちかまえていた。ろくに英会話もできない自分にとっては、とても任務を果たすことはできないと思い、会社の命令に対し辞任の申し出を行ったが、お前にしかできない仕事だと説得され、不安を抱えたま

ま、任務地に赴くこととなった。思えばこれが「NO といわない人生」の出発点だったと思う。その後結果的にはイラクのバグダッドのサイトに、約 8,000 名にのぼるマンパワーを送り込んだ訳であるが、このときの貴重な得難い体験は、私の血となり肉となって、その後の会社業務や自信の自己啓発にどんなにか役立ったか計り知れないものがあったと思っている。

イラクの後、東南アジアで O. D. A. など経済協力案件や、日本企業の現地進出に伴う工場建設などの工事に従事した後、50 歳で帰国を命じられることになった。場所は九州支店で支店長時代を含め通算 7 年の充実した期間を過ごす。57 歳で海外開発本部長として再び海外を担当、59 歳で大阪支店長そして 62 歳で専務を退任の後、加賀田組社長となり、現在に到っている。戦時中、「国を出てから幾月ぞ——」という軍歌があったが、私の場合「自宅を出てから幾月ぞ——」で約 25 年の間、東京の自宅には縁がなく、未だ旅から旅の人生が続いている。仕事はこの様に苦労したことが今では甘美な思い出となり、得難い経験を積むことが出来、世界の各地に多くの友人もできた。自分自身は仕事をエンジョイしてきたが、家族にとってはよい父親又は夫ではなかったかもしれない。

会社生活を振り返ってみると、実に波瀾万丈、特に 40 代以降は各地を転々とし、いろいろな仕事に携わることができた。自分には到底できそうにもない仕事でも、これを乗り越えることで、また新たな課題を与えられ、逃げることなく正面から取り組むことで、むしろストレスを自分の糧として来たことが今日の自分を支えてきたのではないかと思う。

人はなぜこの世に生まれてきたのか、限られた人生をどのように過ごせばいいのか或いは、何をしなければならぬか？ 人はオギャーと生まれたときに、それぞれ宿命を刷り込まれ、生かされた人生の中で、課題を与えられこれを乗り越えることで自らを磨くというパターンを繰り返し最後の時を迎えるのではあるまいか。

それならば、折角天が与えた試練とか課題から逃げまどわず、「転機」を生かして自らを磨くことが天が期待したことであり、人が人たる所以ではないか。

私は今後とも「NO といわない人生」を貫き、フルタイムな人生を全うしたいと思っている。